
ちいさなせかい

桐生 拓人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちいさなせかい

【Nコード】

N9616B

【作者名】

桐生 拓人

【あらすじ】

ぼくたちの旅はここからはじまるんだよ。 さあ、行こう。
総てが君を待ってる。

Memoire - きおく - (前書き)

あらすじ。 回想です。

M e m o i r e - きおく -

暗い部屋。冷たい床。格子の嵌まった窓。

その仔はいつも、其処から見える四角い空を見上げていました。

毎日毎日飽きもせず、おんなじ日々の繰り返し。

ホントは逃げられなかっただけ。

昼は硬いベッドで本を読み、夜は冷たい床に座って四角い空を眺める毎日。

ごく稀に、調子がいい時は誰も聞くことのないヴァイオリンを奏でます。

独り。独り。部屋の真ん中。こっそりと弦を震わせて。

その旋律はとても儚く、切なく、美しく、とても甘い響き。麻薬のように全身に行渡り、僕の心を虜にします。

魔法に掛かって僕は、涙の止め方を忘れます。

孤独な心を溶かした音色は僕を捉えて離さない。

あの仔は、そんな僕をいつでも優しく抱き上げてくれました。

暖かい目で見つめてくれました。

微笑んでくれました。

ま白い肌の君。

大きなお城で独り。

ずっと閉じ込められていました。

君の部屋は、北向きの暗い部屋で、小さな窓。決して陽のあたらない部屋。

日に一度の食事。小さく小柄な体。

体が弱いため、陽にあたることもままならない為に、病的な程白い肌をした君はとても孤独でした。

いつもいつも。

小さな窓から見る空は四角く色がなかった。

部屋から出ることも叶わずに、君はただ、其処に居ました。

あの人が怖い

だから、僕は連れ出しました。

怖いのなら逃げればいい。

夜闇に紛れ、人目を掻い潜り、使用人を欺き、冷たいベッドには毛布を仕込んで。

それなりに裕福でしたが致し方ない。

あの仔と僕は城を出ました。

黒い大きなフード付きのガウンを羽織り、右手にヴァイオリンケース。ポケットには金貨を詰めて。

旅立ちました。

四角い空の代わりに、満天の星空をあげる。

贅沢な暮らしの代わりに、四季の移り変わりをみせよう。

自分以外に逢う生き物。

花も蝶も鳥も虫も、暖かい風総てが君を待っているよ。

さあ、行こう。

P e r e ・おとつちん ・（前書き）

未完了。

人間が歩いている。

広い広い砂漠の中を黙々と。小柄な身体に纏ったガウンを、砂を
孕んだ風が揺らしていく。

その小さな足跡の上を、更に小さな足が追いかける。

人間は少年だった。

黒いフード付きのガウンの下からは、淡い栗色の髪と、明らかに
不健康そうな白い肌が伺える。

小さく形のいい鼻先を汗が伝っていく。

どれだけの距離を歩き続けたのか、黒いブーツは先が破れ、踵は
磨り減って歪んでいる。

砂で出来た大海原の上を、ひたすら足を動かし進んでいた。

その背中に続くように、黒くて小さな四本足が追いかける。

普段はピンと立った三角の耳も、砂が入らないようずっと閉じっ
ぱなしだし、自慢の黒い毛は砂ですっかり灰色だ。

じりじりと強い日差しで、太陽は容赦なく一人と一匹を照らし出す。

照り返しもさることながら、今日は一段と強い直射日光。

やがて太陽が真上から少し西に傾いた頃、一人と一匹はぐらりと傾いで倒れ、それっきりぱたりと動かなくなった。

何処かで虫が鳴いている。

小さく砂漠の真ん中にあるこの街でも、昼間から市場は大賑わいだ。

黄色く高い家々の間を、沢山の出店が立ち並んでいる。夏虫の大

合唱に重ねて、商いをする声が市場を行き交う。

住民が大半だが、商品売買の為に外の町からわざわざやってくる旅人も少なくない。

お蔭で宿屋も大繁盛だ。

昼過ぎになると朝ほどの活気は無くなった。

しかし、街の外れにある宿屋では賑やかな声が耐えない。

一階にある食堂では、宿屋の娘と思われる少女が、街の男衆の給仕をしていた。

小さな身体にオレンジの強い金髪。腰でまくタイプのエプロンをまいている。

「おい、フルール。こっちにビール持ってきてくれ」

フルールは呆れた顔をしながら男に言った。

「もお。あんまり飲み過ぎると狸になるよっ」

彼女の父親は売買をする商品を運ぶ商人だが、仕事は偶にしか来ない為副職として小さな宿屋の経営をしていた。

それも今ではすっかり逆転して、宿屋が本職のようだが。

父親と二人暮しのせいもあり、フルールは若干10歳にして宿屋の切り盛りが一通り出来るようになっていた。

父の友人であるこの街の男達とも仲がよく、親子のように接していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9616b/>

ちいさなせかい

2010年10月9日03時38分発行